



# 厄年を危く經過して

濱崎善三郎

【五】

九、百折不撓居士  
 佛教では、由來生死の問  
 題をやかましく云ふ。道元  
 禪師が佛なる道を

佛なるにいとやすきみちあり、  
 もろもろの悪をつくらず、生死に  
 著するころなく、一切衆生のた  
 めにあはれみふかくして上をうや  
 まひ、下をあはれみ、よろづをい  
 きふころなく、れがふころなく  
 くて心におもふころなく、うれ  
 るころなき、これを佛と名づく。  
 と説かれた。此中にも「生  
 死に著するころなく」と  
 あり。蓮如上人の白骨の御  
 文章にも

夫れ人間の浮生なる相をつら  
 観するに、凡そ果敢なきものは、  
 此の世の、始、中、終、幻の如く  
 なる一期なり。  
 とある程です。私は學生時  
 代圓覺寺の老師から「無」字  
 の公案をいたされたのであ  
 ったが、此の「無」はそつち  
 のけにして、爾來二十年、  
 私の心頭に去來したのは、  
 生死の問題でありました。  
 靈魂が肉體の死と共に、  
 完全に滅し去ることも、其  
 時分やつと、はつきり合點  
 が行きました。  
 そんなわけで、私は自分  
 の戒名は、せめて生きてる  
 間に自分でつけて置きたい

と念じてゐました。特に一  
 昨年列車事故以來は、折  
 角助かつた命だ、百までも  
 長命したいものと、健康に  
 は萬全の注意はしてゐるが  
 然し、そんな運のよいこ  
 とばかりあるものではない  
 今迄生きてゐたのが、有難  
 いではないか、勿體ないで  
 はないか、先づ此の邊で、自  
 分の位牌でもこしらへて置  
 かうと、昨十二年七月三十  
 日、長男に書かせたのが、  
 此の「百折不撓居士」です  
 「へたれぬ、老」と、特に假名  
 をつけました。八年前亡父  
 の戒名「大慈院忍義謙徳居  
 士」も私がつけました。父  
 は忍と謙の人であり座敷の  
 床の額には「忍是萬徳之母也」  
 とありました。是は又餘談  
 ですが、醫者であつた私の  
 義兄は、癌で死ぬ直前、平  
 生の無神無佛論者にも似ず  
 坊さんを枕元に呼び、其諒  
 解を得て「不拔良心居士」と  
 自ら戒名をつけました。  
 へたれぬ戒名なら、こんな  
 やさしい戒名ならば、子等  
 や孫達が何處へ行つても、何  
 時でも、思ひ浮べて、心の  
 中で念じても、温めても呉

れませう。それで私は澤山  
 です、本望です。  
 四十五年の私の既往を回  
 顧するとき、運もよかつた  
 らうが、兎に角へたれぬ  
 に闘つて來たつもりである  
 王陽明の言葉をかきて云へ  
 ば、山中の賊にはあらで、  
 大方は私自身の心中の賊と  
 の闘でありました。今後の心  
 構として「へたれぬ」思  
 ひ、他人と比較することも  
 ありません。唯與へられた  
 運命と思ふて甘受する、い  
 さぎよくあきらめる一方に  
 は、その運命を踏み越えて  
 進軍し、精進しなければな  
 りません。力士が土俵ぎは  
 でウンとふんばる、あの踏  
 みこたへる力！、もう返す  
 力！、私共は何處までも、  
 弾力ある人でなければなり  
 ません。  
 人間を磨かねばならぬ、  
 心を鍛へねばならぬ。鐵は  
 火で焼き、槌で叩き、水に  
 入れ、幾十回も之を繰り返  
 して鍛錬する。吾等の心力  
 も鐵の如く、否鐵尙ほ然り  
 人間鍛へざるべしむやで  
 あります。  
 書も讀まう、他の話も聽  
 かう、求むる心さへあらば  
 善くなり度いといふ氣持さ  
 へあれば、天地萬物あらゆ

て、これが最初からもう駄  
 目だ々々々、力漕も努力も  
 せず只泣き叫んでゐたら、  
 とうの昔、私共の命はあり  
 ません。世の中は萬事、こ  
 んなもんではないでせうか  
 そりや人間ですから、長  
 い一生の間には、失敗も後  
 悔も澤山ありますよ、然し  
 過去を悔むも詮なく、又將  
 來を憂ふるも益はない。周  
 圍を見廻はす必要もなけれ  
 ば、他人と比較することも  
 ありません。唯與へられた  
 運命と思ふて甘受する、い  
 さぎよくあきらめる一方に  
 は、その運命を踏み越えて  
 進軍し、精進しなければな  
 りません。力士が土俵ぎは  
 でウンとふんばる、あの踏  
 みこたへる力！、もう返す  
 力！、私共は何處までも、  
 弾力ある人でなければなり  
 ません。  
 人間を磨かねばならぬ、  
 心を鍛へねばならぬ。鐵は  
 火で焼き、槌で叩き、水に  
 入れ、幾十回も之を繰り返  
 して鍛錬する。吾等の心力  
 も鐵の如く、否鐵尙ほ然り  
 人間鍛へざるべしむやで  
 あります。  
 書も讀まう、他の話も聽  
 かう、求むる心さへあらば  
 善くなり度いといふ氣持さ  
 へあれば、天地萬物あらゆ

るものが、教訓を與へて呉  
 れる。天に輝く星の一つ、  
 地に咲く一輪の草花でも、  
 心して見れば何かを學び、  
 何かの暗示を受ける。學者  
 の計算では、人間の祖先が  
 此の地球上に出現してから  
 百三十五萬年になるといふ  
 此頃子供の中等教科書を讀  
 んで見ると、太陽の容積は  
 地球の百三十萬倍あるとい  
 ふではありませんか。古今  
 の悠遠なる、天地の廣大無  
 邊なる、想像の外でありま  
 す。藤村操ならば、此邊で  
 「悠々たる哉天地、遂々たる哉古今  
 五尺の小を以て、此の大を以て  
 むさ欲す、ホレーショの哲學、竟  
 に何等のオライチを價するも  
 のぞ。萬有の真相は、唯一言に  
 て悉す。曰く、不可解。我れ此の  
 恨を懷いて、煩悶終に死を決する  
 に至る。既に巖頭に立つに及んで  
 胸中何等の不安あるなし。始めて  
 知る、大なる悲觀は、大なる樂觀  
 と一致するを」  
 と叫んで、華嚴の巖頭から  
 飛び込むところでありませ  
 う。が然しそれは大宇宙の眞  
 相は、我等人類が假令千萬  
 年を費しても、その不可解  
 の扉を開くことは、絶対に  
 不可能であるは勿論大自然  
 に比べて、吾等人間が如何  
 に微小にして無力なるかを  
 自覺しない、幼稚なる見地  
 から來て居ると思ふ。龍軍  
 (五頁へ續く)

## 教育制度改革概論

矢野恒太 大内民恵 著

(四六版二二頁 定價五十錢 郵税六錢)

行き詰れる現代の教育制度を解體し  
 て、學理と實際と、歴史と實地とを  
 ら新に大内民恵と矢野恒太とが提唱す。天下  
 知名の士の賛同校章に違あらず。  
 れど未だ一人の抗議者も現はれず。

## 我國教育學界の權威

前京大總長小西重直博士

書を寄せて曰く、多年ノ御體験ヲ實地  
 ノ御試練ニ基キ眞實學界ノ大精神ヲ拜  
 味仕テ不思議敬ニ打テ御中ノ御儀云々

## 日本評論社

東京三丁目

發行所 内郷村報社

梅の花にまけないでもすむ  
 ぞ、といふのであります。か  
 ら、古人も心中の賊は餘程  
 (二頁より續く)

御諒承を願ひたいと、思ふ  
 のであります。さらば各位！  
 いやが上に

### 年頭所感

内郷村長 沼田濱之助

茲に昭和十三年の春を迎へるに當り、謹んで 聖壽の萬歳と、皇室の御繁榮とを壽ぎ奉ると共に、日夜戦線に勞苦を重ね、皇威を宣揚しつゝある、皇軍の將兵諸士に對し、深謝の意を表する次第である。  
現下内外の情勢は、支那事變を契機として、愈々多事多端となり、相當長期に亘るを覺悟せねばならぬ。随つて村民各位は飽迄も堅忍持久の精神を以て、各自の本分に應じて其全力を盡し、假そめにも弛緩を生ずるが如きことなく、銃後國民の護りを固うし此の難局を打開し、所期目的の貫徹を圖る爲めには、舉國一致、盡忠報國の誠を致し、益々國運進展の爲めに勇往邁進し、以て皇運を扶翼し奉ることを、期せられんことを望む次第である。

### 村會決議概要

十二月二十二日午後一時より開會左記の件を可決せり

議案第一號	寄附採納の件	議案第三號	歳入歳出追加豫算
金一、三四八圓一〇錢也	右は内郷尋常高等小學校備品平形ピアノ壹臺附屬品共購入費の中へ同窓會より寄附採納するものとす。	歳入	金三七三六圓 追加豫算額
議案第二號	議案第二號	歳出	金二七七九圓 更正豫算額
小學校敷地並に道路敷買收の件	小學校敷地並に道路敷買收の件	合計一、九五二、五一圓	已定豫算額
内郷高等校敷地並に道路敷として左記土地を買收するものとす。	一、高坂字台一〇二番地 山林十六坪五合 小學校敷地 同上 八九番地 ノ内 畑 四坪道路敷地	合計一、九五二、五一圓	已定豫算額
		經常部已定豫算額	金一、三、八二二、八圓
		臨時部已定豫算額	金一、五二二圓
		追加豫算額	同上
		更正豫算額	同上
		合計	金一九六圓同上更正豫算額
			合計一、九五二、五一圓

### 内譯

歳入	三、義務教育費國庫下渡金 二、三一八圓 八、寄附金 一、三四八圓 一〇、雑収入 七五圓 一一、村税(二四款更正) 一、七七五圓 一四、補給金(二款ヨリ) 一、七七五圓 歳入合計 三、七三六圓
歳出經常部	三、役場費 四四五圓 二、給料 三〇圓 四、需用費 四一五圓 五、小學校費 一、六四九圓 三、需用費 一、六四九圓 七、警備費 六〇圓 二、需用費 六〇圓 二、雜支出 七〇圓 經常部歳出計 二、二二四圓
歳出臨時部	一、補助費(十二款より更正) 四、軍人分會補助 一五〇圓 二、ガソリンポンプ購入補助(更正額)一九六圓 四、小學校營繕費六八五圓 一、校舍修繕費一五〇圓 八、土地買收費 二五〇圓 十、物件補償費一〇〇圓 十四、雜費 一五〇圓 十五、盛土費 二五〇圓 五、雜支出 八七三圓

### 村葬舉行

本村關係名譽の戦死者、故郷北郷久次郎、菅野清一、鈴木喜一郎、各上等兵、並に松崎光雄二等兵曹の村葬は來る二十三日午後一時より第二小學校庭に於て、舉行する事となつた。

### 對時局教育施設

高坂校 事變下に於ける、小學校教育上特に努力すべきこと少からざれども、教師先づ身の修養につとめ、一層其の職務に勵精するは勿論、皇國精神の發揚に一段の努力をなし、兒童に對しては、時局の正しき認識を與へ、銃後の少年少女としての覺悟を強固にし、以て聖旨に副ひ奉らむと、過般當校に於て其の實行細案をつくり實行中にして其の主なるものを左に掲ぐ。  
一、學校長は毎月一回國民精神に關する連續講話をなす。  
二、朝會後、伊勢神宮及宮

### 消防出初式

全國一齊に舉行せられた。消防出初式を當村では一月六日午前十一時より幹部同出場、午後一時より役場議事堂に於て其式を舉行した

### 駐在巡查異動

昨年中より缺員中の當村御所駐在所へは、一月五日日本署より森道康氏が轉勤して來た。

- 3、城の遙拜をなす。
- 4、新聞雜誌等に御掲載の御影を鄭重にするため各教室に奉安袋を備ふ
- 5、陣中美談、銃後美談等時局に關する資料を集め、又之に關する講話をなす。
- 6、事變伸展の状況を地圖にて示す。
- 7、出征軍人の遺家族の慰問
- 8、出征軍人關係の兒童には徽章を付ける。
- 9、紙屑の賣上金及勞力収入による。
- 10、日の丸辨當を毎月一回定め出征軍人の不自由を慰み、清潔を戒む。
- 11、毎週一回軍歌を合唱せしめ銃後の氣勢を擧ぐ
- 12、毎月七日に戰捷祈願神社參拜並に神社清掃を行ふ。
- 13、慰問品、慰問文を送る
- 14、体位の向上に留意し身心の鍛錬につとむ。
- 15、防空思想の普及につとむ。

# 皇后陛下 御歌 傳達式

御菓子

本縣後會に於ては、過般  
 應召出征軍人の遺家族に對  
 賜はりたして御歌を、三  
 保公、に揮毫を乞ひ、其複  
 寫を作成して頒布すること  
 となりたるを以て、本に村  
 於ては十二月二十五日午前  
 十時より第二小學校に於て  
 遺家族九百餘名、村會議員  
 區長、方面委員其他各種團  
 體參列莊嚴裡に、之れが頒  
 布式を舉行した。

次いで、戦死者遺族に對し  
 皇后陛下より賜はりたる  
 御菓子の傳達式は一月十  
 一日午後一時より役場議事  
 堂に於て村内各名譽職參列  
 の下れ之を舉行した。

## 南京 祝賀 燈行列

南京陥落の報傳はるや、本  
 村青年團に於ては、直ちに  
 協議會を開き、祝賀燈行  
 列を決議し、十四日午後六時  
 より、全員家政校庭に集合  
 馬目團長先づ開會を宣し、  
 國歌奉唱宮城明治神宮、靖  
 國神社進拜を終へ、各自提  
 燈をかざし、全村に涉つて  
 盛大なる行列を行つた。

## 新年祝賀式

一、役場 午前八時  
 二、學校 同 九時  
 三、警察役員 同 十時  
 四、同役村諸員 同 十一時  
 五、同從業員 同 八時半  
 六、綴山神社 同  
 七、高坂神社 同  
 八、内郷山神社 同

## 松崎兵曹の凱旋

無言支那事變に參加中不幸  
 病魔に襲はれ、旅順病院に  
 入院加療中逝去せる、松崎  
 光雄二等兵曹の遺骨は、舊  
 臘十八日、本村金澤助役並  
 に遺族に隨せられ、午後三  
 時に遺族に隨せられ、午後三  
 時到着、知事の花輪、村會  
 議員、區長、各校長、方面  
 委員、並に各種團體長出迎  
 驛頭にて焼香後、海軍班儀  
 仗のもとに自宅く安置した

## 方面書記異動

方面書記吉田仙治氏解職、  
 其の後任として書記渡邊忠  
 義氏一月七日附を以て知事  
 より囑託せられた。

## 國防献金と慰問品

(恤兵金)  
 九圓三〇錢  
 (職員生徒一同銀紙寄附)  
 高等校職員生徒一同  
 (出動軍人實族扶助金)  
 貳拾貳圓六拾錢  
 (年賀ノ節約)  
 村內學校職員一同  
 九圓八拾錢 宮青年分團  
 貳拾五圓 宮草野啓助  
 總計  
 金貳千參百八拾圓九拾八錢

## 急 告

國稅、田租第一期、宅地租  
 第二期、所得稅第三期は本  
 月廿五日納期限ですから御  
 忘れなく納付して下さい。

## 慰靈祭參列

支那事變に依り名譽の戦死  
 を遂げられ本村關係出身故  
 高橋、熊田、鈴木、北郷、  
 菅野、各上等兵慰靈祭參列  
 の爲め沼田村長、新發田、  
 若松兩市へ、十二日出張せ  
 り。

## 方面委員會

一月十二日午後一時より、  
 村會議事堂に開催、左記の  
 件を協議決定した。  
 一、歳末同情金寄附狀決並  
 に給與者報告方の件

一、被服縫製作事に關する  
 件  
 三、取扱上の注意。  
 四、昭和十三年度社會事業  
 費豫算掲上方に關する件

## 滿蒙青少年義勇軍

開拓青少年義勇軍  
 今回大日本聯合青年團の一  
 大運動たる、滿蒙開拓青少  
 年義勇軍は十六才以上十九  
 才迄の青少年を一大集團と  
 し、明年は少くとも、五萬  
 人以上現地に設けられる一  
 大訓練所に入所せしめ、約  
 一ヶ年間ここで、全部を寄  
 宿舎に入れ、日滿一体の國  
 策遂行の戦士にふさわしい  
 學課、軍事教練農業實習等  
 を授け、此處を卒業すると  
 全滿各地の小訓練所へ鐵  
 道沿線、既設移民地、將來  
 の入植地等に、入所せし  
 めて、更にその訓練を繼續  
 して、約三ヶ年間ミツチリと  
 鍛へて、此三ヶ年間に兵  
 役に行く者は行つてくる  
 一その修了生には希望によ  
 つて、國策移民たらしめ、  
 十丁歩の自作農たるに必要  
 な土地や資金を與へると言  
 ふのである。

募集要綱は來る、二十二日  
 市町村長、青年團長、小學  
 校長、青年學校長等の協議  
 會に於て指導決定するも大

## 略次の如し。

- 一、趣旨 省略
- 二、募集に當るもの  
大日本聯合青年團  
滿洲移住協會
- 三、應募資格、算へ年十六  
才(早生れの者は十五才)  
より十九才迄の身體強健  
意志強固なる者。
- 四、手續  
市町村長、又は學校長、  
青年團長、其他關係團體  
に申出、その推薦を経て  
大日本聯合青年團若しくは  
滿洲移住協會に申込むこ  
と。
- 五、内地訓練  
期間二ヶ月以内、其他略  
其他費用、現地訓練、編成  
携帶品等省略。

## 農 家 曆

一月 計畫の月  
 (下旬)果樹類の寒肥を終る事。  
 苗代の寒肥。蔬菜軟化物の收穫並  
 販賣。豚の種付。鶏の孵化始め。  
 味噌の醸造。本田肥料準備。

二月 考案の月  
 (上旬)苗代及本田の諸計畫の樹立  
 大小麥の土入及踏壓補肥。各種苗  
 床の踏込。茄子蕃茄胡瓜等の下種  
 鶏卵の孵化抱卵。果實袋の調製。  
 (中旬)果樹類の剪定。果樹桑樹の  
 具殺虫の驅除施行。諸帳簿の總整  
 理及決算。農産種子の共同購入。  
 堆肥の製造増産。促成蔬菜の管理

矢野 恒太序 大内民惠著

教育制度改革概論

(四六版二一頁 定價五十錢 郵税六錢)

そんなわけで、私は自分の戒名は、せめて生きてる間に自分でつけて置きたい

やさい戒名ならば、子等や孫達が何處へ行つても、何時でも、思ひ浮べて、心の中

近して、問一髪、眞に奇蹟的に助かるを得たのであつ

善くなり度いといふ氣持さへあつば、天地萬物あらゆ

に微小にして無力なるかを自覺しない、幼稚なる見地から來て居ると思ふ。龍車

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理を實際に、歴史を實踐から新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同校挙に違あらす。未だ一人の抗議者も現はれず。

我國教育學界の權威 前京大總長小西直博博士 著を寄せて曰く、多年の御體験と實地御試練ニ基ク眞學愛國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思議敬ニ打テ平儀云々。

發行所 日本評論社 東京橋本三丁目 取次所 内郷村報社

(二頁より續く) 梅の花にまけないでもすむぞ、こいふのであります。古人も心中の賊は餘程もてあましたと見えませぬ。朔風に凜と咲く梅の花のやうに、私共も如何なる逆境にもへこたれず、腹を据ゑ、氣を落しつけ、あせらずあわてず、一步一步大地を踏みしめて、

骨を安置し、朝野公私の各團體が之に參列し、其讀み上ぐる弔詞は、靈前に山積する、いとも鄭重なる村葬を舉行して、御英靈を弔ひ後之を各位のお宅に奉送しやがて九段坂上の、靖國神社に奉祀せらるる日を、待つて居るのであります。

頁をそれに充當して、之が實行にとりか、らうと思ふのであります。されど御覽の通りの一小紙、各位のそれ、全部掲載する事は、前到底出来ない事なので、前述の通り、出來得る限り、之を抄録いたそうと思ひますので、其点は一切、此私にお任せ下さる事を、豫め

御諒承を願ひたいと、思ふのであります。 さらば各位! いやが上にも御自重、御健闘下さらん事を、祈願すると共に、其尊き御任務を、立派に果たされて、英姿颯爽、御元氣よく凱旋せらるる日を、一日千秋の思ひを以て、お待ちいたして居ります。

戦場の將兵各位へ 大内民惠

決死、戦場にあつて、苦戦奮闘しつゝあらるゝ、我内郷村出身、並に磐炭に關係を有せらるゝ、陸海空の將兵各位! 我等村民は、暑きにつけ、寒きにつけ、この暑さに、この寒さに、はて我各位は、どうして居らるゝらうと、其御生活を想像し、御苦勞を感謝し又大小戦争のある毎に、何を措いても、地方新聞に、東京新聞の地方版に、先づ眞先きに、目を通して、各位の御安否を、憂慮いたして居るのであります。同時に、銃後の責任を遺憾なく果たさんものと、一家一村を擧げて、緊張其職に精勵

宅を慰問し、萬御不自由なからん事を期して居るのであります。又新たに出征せらるゝ各位に對しては、驛頭に立つて、ちぎれんばかりに國旗を打ぶり、かれんばかりに、歡呼の聲を上げばかりに、不幸無言の凱旋をせらるゝ、各位の御遺骨に對しては、御遺族の方々と共に、歎歎嗚咽、之を驛頭に迎へ、日を期して、便宜然るべき處に、齋場をしつらひ、參謀總長宮殿下をはしめ奉り、各方面より、下賜寄贈の、香華、燈燭、茶菓、珍膳を供へたる、莊嚴なる祭壇を設けて、御遺

之を永久に保存すると共に其内から例へ一部分なりとも、我村報紙上に抄録掲載して、四千の讀者諸君と共に、各位の御苦勞を拜謝し各位の御勳功を旌表いたしたいと、思ひ立つた次第であります。それで從來いたした内から、其を實行致したいと思ふのであります。希くは各位! 以上の微衷を諒せられ、爾後例の通り、御通信を賜はれよ! 本紙は、來月號より特に一

山形旅行中の一首 民惠 山里のさふ人もなき安宿に、こゝろ行く途ふみも聞か

奥羽各縣から 銃後の勇士 續々磐炭に集る

今や我國に於ては、東洋平和の爲に、人類幸福の爲に戦線に、將た銃後に、全國民の精神と、肉體とを總動員して、獅子奮迅の途上にあるのであるが、此時此際我奥羽六縣に於ける、銃後の勇士等は、其先決問題として、先づ一家一村の更生繁榮を講じ、以て其本分を遺憾なく果たさんものと、一村一郷の代表的人物が、其部隊長となつて、二十乃至三十人の健兒を引率して、軍事工業と密接不離の關係を有する我磐城炭礦に續々と參集し來たり、數ヶ所の寄宿舎に散宿して、恰も忠勇なる將兵が、決死戦陣に向ふが如き覺悟を以て

打ちふるふスコップの刃先を、坑内に閃かして、甲斐々々しくも、又雄々しくも採炭事業に従事して居るが其成績を聞くに、日收平均少くも貳圓參拾錢を下らず中には月收百圓を突破するが如き者さへ、決して少なからず、此舊年末に際して參拾圓五拾圓と國許に送金して、雪に埋没せる、東北の天地を賑はして居る。同時に此好成績に鑑み、この數年滯山を決意するものもあれば、又後續部隊を呼び寄せ、より、段取りをして居るものも、少くないこの事である。



